**オンライン・ヒューマンライブラリー体験**

**~コロナ禍のなかでの障がい者の社会参加~**

主発表者：大谷多加志（奈良教育大学特別支援教育研究センター特任准教授）

連名発表者：千葉晃央（立命館大学人間科学研究科客員協力研究員・家族支援と対人援助ちばっち主宰）・木村善男（エイブル・パフォーマンス集団ガラ代表・京都脊髄損傷者連絡会）・吉村夕里（エイブル・パフォーマンス集団ガラ事務局・立命館大学生存額研究所客員研究員）

　ワークショップ企画者たちが所属する「エイブル・パフォーマンス集団ガラ(柄）」(以下：ガラ）は障がい者が参画する地域福祉に関する教育研修と、障がい者の個性や才能を生かしたイベントを実施することをとおして、障がい者の潜在能力の開発と社会参加を促進するとともに、多文化･多世代共生のまちづくりに貢献することを目的として本年4月に設立した任意団体である。同団体の活動のひとつの柱として住民や関係者や学生を対象としたヒューマンライブラリー(以下：HL）の実施があげられる。HLとは、2000年にデンマークの若者たちが、北欧最大の音楽祭であるロスキレ・フェスティバルで始めた「人を貸し出す図書館」の取組である。世間から「マイノリティ」のレッテルを貼られ、画一的に見られがちな人たちが生きている「本」になり、「読者」との対話を通して、多様性を認め合う出会いを創造する。HLは対面形式の実施を原則とするが、コロナ禍のなかでオンライン実施を余儀なくされた。

　しかし、オンライン実施は障がい者の在宅での社会参加や遠隔地との交流ができるという利点がある。また、「本」となった障がい者が内容や時間配分等を主体的に決定するという構造と、「読者」は視聴覚に頼って話を受信するという形式は、双方の集中を高めたり思考を深めたりすると同時に、在宅障がい者の日常をリアルタイムで視聴する機会になることが確認された。

　本ワークショップは、オンラインによるHLの「読者」体験をとおして、「本」になった障がい者との交流を深めることや、障がい者の社会参加とその方法を考える機会とすることを目的としている。同時に、「本」と企画者たちがオンラインによる実施方法についての検証を行うことも目的としている。

　なお、「本」として参加予定の障がい者等は8名で全員がガラのメンバーであり、「本」として顔出しして参加することについては合意を得ている。